

共生のきずなを求めて!

# NPO 現代座

2012年11月1日 発行  
(通巻 455 号)

## 現代座レポート No. 52

- ・ 地域を巡る旅公演の幸せ (1)
- ・ 『友の呼ぶ声』 の上演報告 (2) ~ (3)
- ・ うたと語り『遠い空の下の故郷』 の上演報告 (4)
- ・ アリアンサ移住地史『創設八十年の』 の紹介 (5)
- ・ 木村快の東北被災地紀行 (6)
- ・ 函館の NPO 歌舞団・こぶし座を訪問 (7)
- ・ 現代座「うたと語りの会」秋期例会のお知らせ (8)
- ・ 新入会員・継続会員・寄付者のお名前 (8)

NPO 現代座ホームページ <http://www.gendaiza.org/>

特定非営利活動法人 NPO現代座

発行責任者：木村 快

〒184-0003 東京都小金井市緑町5丁目13番24号 TEL 042-381-5165 (代) FAX042-381-6987

### 地域を巡る旅公演の幸せ

#### 長野、埼玉、北海道の旅から

これが現在の旅公演の俳優とスタッフです。北海道八雲町で撮影。前列左から西河大(俳優・トラック運転、木村快(演出)、東志野香(俳優・楽屋係)、木下美智子(俳優・渉外係)。後列左から高橋康孝(照明助手・トラック運転、今村純一(俳優)、渋谷博史(照明)、寺崎昌広(舞台監督)、黒澤義之(音響効果)。その他に長野市と戸田市では木村康恵がスタッフとしてつきました。

今年には『蒼い空・友の呼ぶ声』で徐々に旅公演が実現できました。「旅」とは言っても五月に長野県で二ヶ所五ステージ、九月から十月にかけて長野県二ヶ所四ステージ、埼玉県で一ヶ所、北海道で二ヶ所と、公演回数は多くありません。けれど三年ほど地方でのお芝居の公演ができなかったため、久しぶりに「旅公演」の幸せを感じました。

『友の呼ぶ声』は地域の小さな会場でも上演できることを目標に企画しました。セットも出来るだけ簡略化し、公演班のメンバーも、出演者四人とスタッフ四人の合計八人という少人数です。トラックから荷物を降ろす時は、実行委員会の皆さんのお手伝い無しにはできません。どの公演も多くの方に助けていただきながらの公演でした。

地方での公演の良さは、何といたって一生涯懸命がんばってチケットを売ったり、準備してくださる実行委員の皆さんが創り出す、あたたかい劇場です。その町ごとにお客さんの反応も違い、思いがけないところで笑いが起きたりして、皆さんの発見をさせていただきました。

信濃路はちょうど稲刈りが終わったところで、アルプスの山々がとてもきれいでした。北海道の八雲町では温泉に泊めていただいて露天風呂につかりながら、北海道の空気をいっぱい吸ってリフレッシュしました。

「やっぱり旅公演はいいなあ！」というのがみんなの実感です。

地域のつながりが薄れて行く今の時代、実行委員会をつくって公演することは容易ではありません。だからこそ、地域の心を共鳴させる劇場づくりが大切だとも思います。とかく悲観的になりがちな今日この頃ですが、実際に劇場の中心身を置いてみると、やはりなんとしても地域の人々と協力して公演をやりつつ抜けなければと感じます。(木下美智子)



# 『友の呼ぶ声』 上演報告

安曇野市公演 九月二十五日（火）

会場 穂高交流センター「みらい」

「みらい」は二〇〇席ですから昼夜二回の公演としましたが、どうすれば目標の四〇〇席を埋めることができのるか途方にくれました。三ヶ月間、人を訪ねては語り、また歩き、結果的に一〇〇人を超える協力者の皆さんのおかげで、昼夜ともに満席の劇場を実現することができました。

安曇野公演では西村忠彦さんのご協力が大きな力になりました。西村さんは五月の松本公演の送り出しで「私も（劇中の太田老人と同じ）八十二歳です」といつてさわやかに立ち去られた方でした。長年高校教師を勤められ、退職後は二十年間鈴蘭幼稚園の園長を勤めておられます。そして現在は脱原発運動の先頭で奮闘しておられます。

安曇野市は「きけわだつみのこえ」で知られる上原良司の出身地です。上原良司の妹さん、清子さん、登志子



安曇野市観客席



安曇野市実行委員会



長野市実行委員会



戸田市実行委員会

さんがご健在で、一生懸命知り合いをお誘いしていただき、当日は会場入り口に大きな祝いのお花を飾ってくださいました。車椅子で会場にいられた清子さんを囲んで、久しぶりに出会ったご高齢の地元の皆さんが挨拶を交わされる場面は見ていて心がなごみました。

お客さんは安曇野市だけでなく、大町市、池田町、松川町、筑北などからたくさんの方が足を運んでくださいました。舞台最後の挨拶で、私は上原清子さんに小さな花束を舞台から贈ることにしました。私たちが大事なことを忘れないように、その時代を生きた方々が、これからもお元気であって欲しいと願うことです。

若くして戦火の中に散っていった彼らの心境を思うとき、やはり、「生きている私はなにを為すべきか」という問いがこみあげてきます。「友の呼ぶ声」を上原良司と重ねて観ることが出来るのはおそらく安曇野市に限られるでしょうが、私にとって、劇中で太田老人に語りかけてくる戦友山村の声は、間違いなく上原良司そのものなのです。この体験は、きっとこれからの「友の呼ぶ声」の舞台を成長させてくれると信じています。（今村純二）

あなたの心に良司の声は届いていますか

西村忠彦



上原良司は一九四五年五月に沖繩上空において特攻機で戦死した安曇野出身の学徒兵です。彼は「いざれ自由は勝利する」と断言し、

人間本来の自由が生き生きと存在する日本の姿を思い描きました。良司の遺書は戦没学生の書簡集「きけわだつみのこえ」の巻頭に掲げられています。

今、この国に彼の夢見た理想の国は実現しているであろうかと考えます。3・11以後の私たちに「あなたたちはこの国をどういう国にしたいのですか」と問いかけているように思えます。彼の郷里の皆さんにこの声を聴いていただきたい。穂高の会場で「友の呼ぶ声」を上演したいと、私が前々から切望していた理由です。そしてお心を共鳴させていただくことができました。の思いを一途にこの公演が実現しました。

（開幕前の挨拶より）

長野市公演 九月二十八日(金)

会場 長野市立東部文化ホール  
主催 「現代座に集う会」友の呼ぶ声長野市  
実行委員会

二月、まだ厳しい寒さのなか、本道正和さんのお宅に集まった昔の青年たちが「また昔の仲間たちに呼びかけてやってみようか」ということでスタートしました。

長野市では統一劇場時代から『希望』、『ふるさと』、『おっ母さん』、『星と波と風と』、『朝の風に吹かれて』、『もくれんのうた』などが取り組まれており、本道さんご夫妻をはじめ、川中島、篠ノ井、高山村、須坂市などの支持者が青年時代の熱情を思い起こしながらの取り組みでした。

昼夜二回四〇〇人の目標には及びませんでした。当日は昔統一劇場を見たというお客さまが多くあたたかい客席でした。アンケータにも統一劇場時代からの応援者の励ましの言葉があつて「やってよかった」とあらためて四十七年の歴史を感じさせられました。

最後の打ち上げ会も「これを機に、またこんな飲み会をやりたいね」と和気あいあいの雰囲気でした。そして出演料の不足分はNPO現代座の協力会員を増やすことで応援しようと頑張ってくれています。(今村純二)

埼玉県戸田市公演 九月二十九日(土)

会場 コンパル(笹目)コミュニティセンター  
主催 NPO現代座戸田公演を観る会

実行委員長石本誠さんと事務局長の角田道郎先生は、以前隣の蕨市で「虹の立つ海」

と「約束の水」を公演した時にも実行委員として取り組んでいます。今回は地域の方々に観ていただくこと、市の中心部からやや離れた笹目コミュニティセンターで上演することになりました。芝居の公演は初めてです。たった五人の実行委員会でしたが、笹目地区のコミュニティ協議会、各町会の会長さんに協力をお願いし、創意ある取り組みをして来ました。

当日は、客席数二一〇の会場に一五〇人近くの方が観て下さり、最初から笑いが起こり、ドラマが進む中で涙する人も目立つなど、活気のあるいい公演になりました。初めて芝居を観た人達も満足して帰って行く様子を見て、苦労しながらも取り組んで良かったという喜びを実行委員の人と共に味わいました。(中村保好)

北海道八雲町

①八雲地域公演 十月五日(金)

会場 八雲町民センター  
主催 現代座八雲公演実行委員会

八雲町は日本で最初に酪農が始められた町です。かつて現代座が北海道公演事務所を置いた町でもあります。この町の「若人の集い」は北海道三大あんどん祭りの一つ、八雲あんどん祭りを起こしたグループです。会の中心はずでに三世代目。演劇の取り組みは初めてという若者もかなりいました。

今回は若い世代が八雲地域だけでなく、新しく合併した熊石地域も含めて、自分たちの町の文化を育てようと、熊石地域での上演を実現させるためにがんばりました。

②熊石地域公演 十月六日(土)

会場 熊石福祉センター  
主催 現代座八雲公演実行委員会

熊石地域は元熊石町。平成十七年に八雲町と合併。同じ八雲町でも太平洋側の八雲地域からは峠を越えて、日本海側の海岸地帯にあります。熊石地域は人口三千人の高齢者の多い地域になっています。

熊石では元役場職員の松田さんを窓口にして、ディス・ネットワークと呼ばれる中年のご婦人の方のグループが頑張ってくれました。しかし小さな漁師町で、演劇など上演されたことはないと言います。そこで八雲地域の「若人の集い」の若者たちが、熊石地域の手足となつて公演が実現しました。この取り組みで初めて熊石地域に足を踏み入れた若者も少なくありませんでした。

会場の福祉センターは数年後には取り壊されるという古くてこじんまりした会場で、小さな舞台があるのですが、舞台装置と照明を設置することが出来ません。そこで、客席と同じ平面の平土間舞台上で上演することになりました。お客さんに見えやすいように舞台と客席の距離の設定、椅子の配置の工夫を工夫しました。ディス・ネットワークの皆さんはこの会場で演劇が実現したのは初めてのことで感動しておられました。その姿に若者達も感動。これからは共に文化の取り組みを進めていきたいと思います。小さな町ならではのコミュニティの強さを感じさせられました。(木下美智子)



八雲町実行委員会



八雲町熊石地区福祉会館の平戸間の舞台。記念に熊石の名産品を頂く。

## 『遠い空の下の故郷』

## ハンセン病療養所に生きて

ハンセン病療養所で暮らす私のお友達の人生を語ることを通して、ハンセン病の差別のことを少しでもいっしょに考えていただく活動です。

八月に一回、十月は三力所で聞いていただきました。

八月八日(水) 長野県辰野町 明光寺

おせがき法要に呼んでいただきました。七月にご住職の保坂さんにお会いし、その場で決めてくださいました。檀家の皆さんは「あら、楽器があるけど今日は何があるんだらう」とびっくりしていましたが、語りが始まるととてもよく聞いてくださいました。

法要のあと、手作りの料理をいただきながらみんなで会食です。役員の皆さんは「こつこついうことはどんどんやるべきだ」と、私と演奏の吉野を励ましてくださいました。暑さが心配でしたが、前日から急に温度が下がり、涼しい風の中での、ホッとするような公演でした。



長野県辰野町 明光寺檀徒の皆さん



北海道では今村純二のアコーディオンと組む



曹洞宗北海道第一宗務所 檀信徒研修会で



八雲中学は三年生だけ。



野田生中学は全校生徒で47人。

十月三日(水) 曹洞宗北海道第一宗務所 檀信徒研修会

はじめて北海道の宗務所の研修に呼んでいただきました。北海道での公演は今村純二のアコーディオンと組んでやることになり、「友の呼ぶ声」の稽古の合間を縫って二人の呼吸を合わせる稽古をして臨みました。

いざ北海道へ出発というとき、台風のためフェリーが欠航になるというアクシデントがあり、臨時便で一日前の早朝に苫小牧港着、急遽ホテルの部屋を準備していたなど、宗務所の皆様にはご迷惑をおかけしました。洞爺湖のほとりの大きなホテルに百五十人以上集まった檀信徒の皆さんは、語りが始まると食い入るように集中してくださいました。すすり泣きの声も聞こえます。

終わった後、たくさんの方がご寄付をくださったり、会員になってくださり、また「ぜひ自分のお寺に呼びたい」と声をかけてくださったりしました。また、北海道に行ける日を楽しみにしています。

十月四日(木) 北海道八雲町 八雲中学校

八雲中学校では三年生に聞いてもらいました。二〇〇六年にも、今回と同じように、町の男女共同参画の事業で呼んでいただきました。ハンセン病については何も知らない生徒さんが多いので、少しでも分かってもらえるように丁寧に話しました。どこまで伝えられたか心配でしたが、後日、生徒さんが父兄に「とてもわかりやすかった」と言っていたと知り、安心しました。

十月五日(金) 北海道八雲町 野田生中学校

朝八時五十分からの公演でした。野田生地区は中心部から少し離れた農村地区です。この町でもかなり人口の移動があるようで、生徒数は前回よりかなり減っていて、広い体育館に全校生徒四十七人の生徒さんが寄り添うように集まっているのが印象的で、でもそれだけに集落のしつかりした人間のつながりを感じました。

終わった後、積極的に質問をしてくれる生徒さんがいましたし、各学年から一名が感想を言ってくださいました。自分の問題としてしっかり受け止めていることに、私たちが感動してしまいました。(木下美智子)

## ブラジル・アリアンサ移住地史

## 『創設八十年』について

木村 快



前号 (No. 51号) で簡単に報告したように、アリアンサ移住地史編纂委員会による『創設八十年』日本語版がやっと完成しました。二〇〇五年から七年の最月がかかり、編纂委員会のうち戦前移住の経験者五名の方が完成を待たずに亡くなされました。

## 協同組合思想に基づいて建設された移住地

アリアンサ移住地は一九二四年(大正十三年)、棄民政策と呼ばれた国策移民のあり方を改革したいと願う人々が、協同組合思想に基づいて建設した移住地です。アリアンサとは「和親・協同」を意味する言葉です。そのため、戦前は日本政府の国策によってさまざまな妨害、圧力を受けた移住地でもあります。

一九九四年、現代座の『もくれんのうた』がブラジル日系四団体の招聘を受け、全ブラジル十四都市で一ヶ月に及ぶ公演が実現したのは、アリアンサ・ユバ農場の全

面的な支援・協力のおかげでした。

アリアンサ移住地は戦後の日系社会では「大正時代のあだ花」と呼ばれ、近代化から取り残された移住地と言われてきました。このため日本側ではほとんど知られることもありませんでした。しかし、ほとんどの日本人移住地が姿を消した二十一世紀、移民百周年の二〇〇八年、アリアンサのユバ農場はブラジル文化の一角としての日本文化の伝統を守った集団として、ブラジル連邦政府から文化功労賞を贈られました。

## 後世に伝えたい移住地の真実

日系社会はすでに三世、四世の時代を迎えつつあり、日系人が日本語による移住史を読み解くことは困難な時代を迎えています。アリアンサの人々は何とか今後の日系人のためにポルトガル語訳の原典となる正確な移住史を編纂しておきたいと願っていました。

アリアンサ移住地が移民会社や日本政府の妨害と圧力によって幾度も危機にさらされたことは、住民の体験としては語り伝えられていますが、それがどのような理由によるものかは、戦前は検閲制度で明記できなかったことと、戦後は日本側の公的資料が散逸し、併せて日本の歴史学が日本近代史から移住史を除外しているため、これまでその実態はよく分かりませんでした。

『創設八十年』は一世による最後のブラジル移住史として日本国策との関係を明確にすることに努力しました。ブラジルにも日本にも移住史の専門家がいなかったため、それは大変な道のりでしたが、国会図書館の憲政資料のなかにアリアンサの体験を裏付ける田中義一内閣の外交電文がいくつも見つかり、やっとアリアンサが辿った歴史の全体像が見えるところまでこぎ着け、日本語版が完成しました。現在ポルトガル語版の編纂が進んでいます。

## アリアンサは日本文化の遺産

今回の編纂では日本側の文献だけでなく、アリアンサ内でも様々な資料が発見されています。日本語資料などは戦時中、日本人を敵視するブラジル側官憲の目を逃れるため焼き捨てられたり、土中に廃棄されるのが普通でした。ところが、アリアンサでは、今回の資料収集で昭和初期からの住民の手による印刷物や写真類が大量に見られています。第三アリアンサの佐藤克郎氏宅土蔵からは戦前期の千点を超えるガラス乾板ネガが発見されました。

異境の地で戦前戦後の困難を協同の力で耐え抜いたアリアンサの歴史は、大正デモクラシーの遺産であり、日本人本来のすばらしさを伝えていきます。東日本大震災からの復興を願う日本人々にもぜひ知っていただきたい歴史です。ブラジルの出版物を入手するのは困難ですので、現在、アリアンサの歴史を紹介する『共生の大地アリアンサ』を執筆中です。

## 『創設八十年』の体裁

A4版 三四四頁

編纂委員 四一人

収集資料 六百点以上

執筆者 三〇人

アリアンサ移住地地図

一九二四年版、

一九二七年版、

一九三〇年版

移住地紹介写真 三一葉

大正十三年以後の写真 四二葉

ガラス乾板写真 四九葉



アリアンサ史編纂委員会の人たち

# 東北被災地紀行

木村 快

北海道公演を終わった後、体力に自信はなかったが、釜石市、唐桑半島、気仙沼市、南三陸町、仙台市若林地区、名取町、福島県南相馬市、飯館村を一週間ばかりかけて歩いてみた。どこもすさまじいばかりの被害だが、特に南三陸町志津川地区は港湾部も市街地も完全な廃墟と化していた。

どの町も統一劇場時代は幾度も巡演した地域である。いったいこれからどうなるのか。気仙沼でも志津川でも、海岸部の廃墟は全体に一メートル前後地盤が沈下しており、至る



上の写真は「出航」取材中の1980年に石巻港で撮影したもの。まぐろ延縄漁船が停泊していた。下は2012年10月、ほぼ同じ地点から撮影。沿岸部は壊滅的被害をうけ、コンクリート造の建物も解体を待っている状態。



気仙沼港を囲む一帯は完全な廃墟。三百トン前後と思われる漁船が陸に打ち上げられたままである。手前にコスモスが咲いていた。

所に水たまりが出来て、水鳥が泳いでいる。

自分の土地に家屋を再建したくても沈下した地盤をどうするかが決まらないと建築許可は出ないという。敗戦後の都市の焼け跡を再建するのは全く事情が違ふ。こうなつては復興と言うより、まるつきり新しい町を作る方法を考え出さなくてはならない。当然、暮らし方も変わらざるを得ない。おそらく気が遠くなるほど時間がかかるだろう。

元統一劇場劇団員だった長谷川清君が石巻、気仙沼地区で障害者や高齢者の移動支援の活動に従事していた。石巻市の仮設住宅の一隅に寝泊まりしているという

ので直接訪ねてみたかったが、石巻市ではホテルが満杯だったのと、長谷川君も忙しく駆け回っているさなかつたので、あらためて訪問することにします。

石巻市はわたしにとって思い出の町である。一九八〇年頃、二百海里問題を背景にした作品を書きたいと思い、東北、北海道を歩き回っていたとき、石巻港でまぐろ延縄船が五隻並んで停泊している光景と出会った。その瞬間、『出航』というタイトルと物語の構成がひらめいた。それから、気仙沼、函館と、遠洋漁船乗組員の話を書いて歩いた。あの港が今どうなっているのか。なにしろ三十年以上前のことだから、正確な場所を思い出せなかつた

が、写真に写り込んでいる看板を頼りに、旧北上川の河口港周辺を歩き回って、やっと同じ場所を見つけたことが出来た。だが、あの賑やかだった港町が全くの廃墟と化していた。コンクリートや重量鉄骨の建物も破壊されたまま放置されており、そこをテレビ局が撮影していた。これはどの町でもそうだが、道路標示の鉄柱や鉄骨が水の圧力で押し曲げられている。

いたましかつたのは名取市閑上（ゆりあげ）地区の中学校が廃墟の中にぼつんと取り残されていることだった。訪ねてみると、学校は安全だと思って避難した子どもや地区の人々を津波が襲ったとい

う。犠牲になった子どもたちへの追悼の花束がうず高く積み上げられていた。

福島県ではためしに国道六号線で原発に向かつて走ってみた。南相馬市の上浦地区で警察に止められた。

そこで、当初は避難地区からはずれており、原発周辺部からの避難者を受け入れていた飯館村を訪ねてみる。今では全村帰宅困難地区になっている。毎日、午後四時までは役場に担当職員が詰めていると聞き、訪ねて見る。二人の職員が応対してくれる。おおよっぱな現状を聞き、簡単な資料を貰う。

この惨状をもたらししたのは政府や官僚の無能さにもあるが、それ以前に、わたしたちの暮らしが、この国に伝えられてきた自然との共生文化を捨て去った結果だったと思うしかない。わたしは広島原爆の焼け跡で育った人間だが、原発によるこの目に見えない放射能汚染は、広島原爆より遥かに深刻な事態ではないかと思った。



南三陸町志津川の防災対策庁舎跡。屋上に避難した人も押し流されたという。

特定非営利活動法人 民族歌舞団

# こぶし座を訪ねる

十月五日、『友の呼ぶ声』八雲町公演に、こぶし座の皆さんが訪ねてきてくれました。公演終了後、木村と木下でこぶし座を訪問することにしました。仕事で不在の中尾雄児さん以外の皆さんが揃って迎えてくれました。

こぶし座の稽古場と座員宿舎は函館市の小高い丘の上にあります。函館湾と函館山が一望できます。

こぶし座は一九六五年、現代座の前身である統一劇場とほとんど同時期の創立で、創立以来ずっと交流を重ねてきています。少人数ながらアイヌ民族や東北の民俗芸能を掘り起こし、地道に公演を重ねています。実はNPO法人になったのも同じ時期で、お互いにそ



こぶし座のみなさんと  
前列左から 横井ひとみ、木下美智子（現代座）、村田さつき、計良正子後列 計良 徹、横井正人、松岡智恵美のみなさん

の活動のあり方、集団運営のあり方について夜を徹して語り合ったこともありました。

こぶし座の人たちの特徴は、なんとと言っても明るいことです。ところが、お互いに最近の活動事情について語り合っていると、実はわたしたちには想像もつかないほどの苦労を重ねているようです。本当に僅かな収入で、お互いが身を寄せ合って協同生活をいとなみ、稽古に、公演に打ち込んでいます。昔から十人前後の集団で、若いメンバーの入れ替わりがあっただけけれど、この数年は若い人の参加が難しくなっていると云います。民俗芸能なんて時代遅れだという心ない言葉を浴びながら、こぶし座はひたすら人々の中で踊りつづけています。

「あなたたちはどうしてそんなに明るいのか？」と尋ねると、「よく分からないけれど、観客の皆さんに向かって踊っていると、お客さんの中からも熱い反応が起こるんです。そしてわたしたちの中に明るくて強い気持ちがあみかえってくるからだと思う」と云います。踊りは人々の暮らしが不安で困難な時代に、それを生き抜くために生まれたものだという芸能の原点を教えられます。

創立者の国田修司さんは同じく創立メンバーである夫人国田寿子さんが永く病床にあり、介護のために退座されておられ、わたしたちは寿子夫人のお見舞いに国田家を訪問しました。そしてわたしたちが函館を離れた翌々日、寿子夫人が亡くなられたとの電話が入りました。寿子さんのご冥福をお祈りします。

(木下美智子)



中央・国田修司さん

## 現代座の講座 八月〜十月

### 劇場講座

毎回、木村快の『劇場の発生と発展』をテキストに、自由な質疑を重ねながら、劇場という観客集団の中ではどんなことが起っているのかを考える。

演劇は鑑賞するものではなく、心の共感を生み出す芸能であり、そのための演技・演出のあり方を考える。

哲学的な視点で喜劇の本質を語っておられた福田定良先生、大脳生理学者としてアドバイスしてくれた千葉康則先生の理論の紹介など。

### S P R E C O R D 雑談会

八月例会は三波春夫の浪曲歌謡について。三波はシベリア抑留経験者であり、自ら作詞した『俄星玄蕃』の語りの部分は本格的なドラマとして構成されている。

九月例会は会員の島根さん八十八歳の誕生日なので、お祝いの杯を重ねながら、現代座資料の中にあつた録画テープから、昭和二十年代の岡晴夫、東海林太郎、伊藤久男、市丸、音丸、美知奴などの歌唱映像を見た。

### 平右衛門プロジェクト

九月例会では小金井郷土史の研究者である小金井史談会名誉会長の鴨下勇さんを迎える。鴨下一門は十六世紀以来、村役人を勤めた家柄。江戸時代以降の小金井周辺の風土、農産物、村役人のことなどについての話を伺った。

次回はメンバーの塚田さんが府中郷土の森博物館で、川崎平右衛門の人格形成についての研究資料を調べて来て報告してくれる予定。

NPO現代座 秋期・うたと語りの会  
差別の中で

たくましく生きた女性たち  
ハンセン病療養所に生きた二人の女性。

六月から始めた「木村快の劇場講座」には、今まで現代座の舞台に出演した俳優だけでなく、「自分もかかわってみよう」と参加した新しい俳優たちもいます。専門家として劇場の理論を学び、新しい演劇を創造しようと語り合う中で、まず「語りに挑戦してみよう」という人が何人もいました。

そこでまず、すでに作品になっているハンセン病療養所の女性のお話を語ってみることにしました。第一回の語り手は、望月千寛さんとみきさちこさん。望月さんは東村山に引っ越してハンセン病の療養所のことを知り、「現代座でハンセン病の語りをやるなら是非自分もやりたい」と参加しました。現代座の舞台は初出演です。

みきさんは何度も出演しているベテランです。何年も前から木村快が「みきさんの語りを書くよ」と言いながら実現していませんので、まずはこの作品からはじめよう、ということになりました。音楽は小川洋さんがピアノの生演奏で入れてくれることになりました。新しいメンバーによる、全くあたらしいものが出来上がると思います。

前にこのお話を聞いたことのある方も、是非おいでください。  
「語りの会」は、できれば定期的に行っていききたいと思えます。

魚のように自由に 望月千寛  
遠い空の下の故郷 みきさちこ  
ピアノ 小川洋  
解説 木下美智子



望月 千寛  
もちつきちひろ



みきさちこ



小川 洋  
おがわひろし



木下美智子

2012年 11月21日(水) 14:00 19:00  
11月23日(金・祝) 14:00

場 所： 現代座 小ホール(現代座会館3階)

参加費： 2,000円(小中高 1,000円)

事前にご予約のうえ、ご参加ください。 042-381-5165(現代座)

駐車場はありません。

木下メール michiko@gendaiza.org

NPO 現代座は会員によって支えられています。

ぜひ会員になって支援してください

- 年間4回発行の活動レポートをお送りします。
- 現代座会館の公演、講座など催し物の参加料を割引します。
- 会員による企画行事をお知らせします。
- お申し出があれば、上演舞台の録画DVDをお送りします。

★年会費(現代座レポート購読料を含む)

一般会員 3,000円  
協賛会員 10,000円(1口以上)

郵便振替口座番号 00110-7-703151 NPO現代座